
軍艦長門の生涯

(下)

阿川弘之自選作品——IX

新潮社版

阿川弘之自選作品

Ⅸ

© Hiroyuki Agawa, Printed in Japan, 1978.



軍艦長門の生涯 ぐんかんながと しょうがいのしやうがいの 下巻		昭和五十三年三月二十日印刷 昭和五十三年三月二十五日発行	著者 阿川弘之 (あがわひろゆき)	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務部 (三六六) 五一一一 編集部 (三六六) 五四一一 振替東京四一八〇八	印刷所 二光印刷株式会社	製本所 新宿加藤製本	定価 二七〇〇円
--	--	---------------------------------	----------------------	------------	--------------	---	--------------	------------	----------

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

軍艦長門の生涯
(下)

作品後記

初出と初収録

370	365	5
-----	-----	---

阿川弘之自選作品

Ⅸ

軍艦長門の生涯

下巻

第二十七章

齋藤二朗の次の長門艦長には、昭和十一年十二月一日付を以て、齋藤より一期下の鮫島具重大佐が補職された。この人はもと岩倉家の出で、岩倉具視の孫にあたる。四男坊だったので、少尉の時海軍大將鮫島員規の養嗣子になった。員規は東郷平八郎と同期で、日露戦争の勲功により男爵に列せられた。それで、員規が明治末年に亡くなったあと、具重が少尉で男爵をついだ。前に書いた通り、歴代三十二人の長門艦長のうち、爵位にあつたのは、十四代目の園田実と十九代目の鮫島具重の二人だけである。

鮫島大佐の長門艦長発令と同時に、聯合艦隊司令長官が、高橋三吉から米内光政中將に変わった。参謀長は、鮫島のク拉斯の岩下保太郎少將、先任参謀が、中沢祐大佐になつた。スタッフが一新すると、艦隊では、先任参謀を中心に、その年度の行動訓練計画を立てる。この春青島を訪問してゐるから、昭和十二年の近海巡航では旅順大連に入らうと、中沢は考へてゐた。

米内は、たいていのことを部下に委せて知らん顔をして

ゐる人であつたが、年度のはじめ、これに關してだけ、中沢先任参謀を呼んで、

「艦隊を大連旅順に入れてくれるな」と、意思表示をした。

「大連に入れば、司令長官として、どうしても新京に出向いて皇帝陛下に拝謁しなくてはならない。俺は、満洲国の皇帝に頭を下げに行くのはいやだよ」

それで、長門は二年連続、青島へ赴くことに決つた。

艦長鮫島具重は、学習院の時柳宗悦と同級生で、少年時代のもつともしたい友人の一人が柳であつた。進む道がちがつてからも、鮫島夫婦と柳宗悦兼子の夫婦は、したい交はりをつづけてゐたが、妙な因縁で、新しい長門乗組員の中にもう一人、柳夫妻を知つてゐる士官がゐた。高角砲指揮官として着任した鈴木成章大尉で、鈴木の家は、千葉県我孫子^{あがひこ}の、元禄時代からつづいた古い農家である。志賀直哉の「和解」に出て来る回春堂は、鈴木の家族がかかりつけの医者であつた。父親の鈴木六之丞が、二十五年間我孫子の町長をつとめた人で、成章が龍ヶ崎中学に入ること、柳宗悦や志賀直哉やバーナード・リーチが、次々我孫子へ移り住んで来た。

鈴木は、

「シゲがまたやつた」

と、近所から始終いたづらの尻を持ちこまれ、母親に、

「わたしは、お前が早く死んでくれないかと思ふよ」

と嘆かれるほどの饑鬼大將だつたが、学校はよく出来て、手賀沼のほとりに住む芸術家たちに、大いに興味をいだいてゐた。リーチが、塚のやうな窯を作つて陶器を焼いてゐるのも珍しかつたし、柳宗悦の奥さんがアルトの発声練習をしてゐるのも、甚だ珍しかつた。田舎の腕白小僧には、はじめのうち、兼子夫人の声が何か分らず、

「犬が泣いてるんぢやないかな」

と思つたりした。柳兼子によると、犬の遠吠えにまちがへられるくらゐはましな方で、大正初年には、東京ですら、声楽の発声練習は人々に奇異の感を与へ、時に気がひだと思はれることがあつた。彼女が青山に初めて所帯を持つたところ、出入りの植木屋の親方が、長屋に住んでゐる柳家の俵夫のところへ、

「お宅の今度の若い奥さんは、お気の毒に、たうとう氣がちがはれたさうで」

と、本気で悔みを言ひに来たことがあるさうである。

中学生の鈴木成章は、発声練習にも驚いたが、バーナー・リーチの窯のそばで、柳宗悦が英語で話をしてゐるのにも驚き、

「よく通じるもんだなあ」

と、感心して眺めてゐたことがあつた。後年、龍ヶ崎中学から海兵を卒業して、中尉で陸奥の乗組になり、長門と

ともに香港へ入港した時、鈴木は十数年前のその光景を思ひ出した。彼が内火艇のチャージで、英国東洋艦隊の旗艦「サッフォーク」を訪れ、艇を繫船桁にながうとしてゐると、「サッフォーク」の艦上から、何かメガホンでどなつてゐる士官がある。リーチと柳宗悦の会話が分らなかつたやうに、英国の士官の言つてゐることは、さつぱり聞き取れなかつた。

「メモに書いて投げてくれ」

と頼まうと思つてゐると、一人の水兵が、

「艇指揮。舷梯へつけれ、舷梯へつけれと言つてます」
と言つた。

「なに？ お前はあの英語が分るのか？」

「いいえ。日本語で言つてをります」

舷梯へ着けて、「サッフォーク」のデッキへ上つてみると、メガホンでどなつてゐたのは主計長で、主計長も艦長も日本に在勤したことがあつて、日本語がなかなか上手であつた。持つて行つた日本酒をたいへん喜んでくれ、上等のシャンパンを五本、土産にもらつて、陸奥へ帰つて来た。鈴木は、少尉の時にも水雷士として長門に勤務したから、今度は二度目の長門乗組である。我孫子の町の、きかん氣な饑鬼大將だつた面影は残つてゐて、ポートが彼の得意であつた。ポート・クルーのコーチは、普通中尉がなるのだが、鈴木は分隊長の古參大尉で、自ら長門の特艇員をきた

へる役を買つて出た。

カッターは軍艦にとつて、ライフ・ボートであり大切な足である。オールが防舷物の役をし、カヌーの腕木のやうな役をするので、安全性が高い。洋上が大波の時、ベデットが下ろせなくても、カッターなら下ろせる。溺者救助、入港時のブイ取り、怪我人や盲腸の急患が出て外科の担任艦へ連れて行く場合、さらには戦争になつていよいよフネが沈むといふ時、練り上げたボート・クルーは是非とも必要なものであつた。

聯合艦隊の年度訓練は、前期のウォーミング・アップがまづ短艇競技で始まる。後期の総仕上げも、戦闘射撃とボートレースで終る。ボートで勝つと、乗員の士気がちがつて来、砲の命中率までよくなるのだが、長門は改装後聯合艦隊のボートレースで総合優勝をしたことが、一度もなかった。

鯨島艦長と副長の圓山英勅中佐とが、後甲板で煙草を吸ひながら、

「今年は何とかして勝たせたいな」

と言つてゐる。クルーの練習ぶりを見てゐた鈴木大尉は、

「あれぢや勝てませんよ」

と口を出した。

「新兵組はまだしも、旧兵組には悪い癖がついてゐます。恰好だけはきれいですが、オールが水を打つ時のしなひ方

を見れば分ります」

「それぢや、鈴木大尉、君やつてくれるか」

鯨島艦長が言つた。

「はあ。しかし艦隊の競技で優勝するには、本職の方をはふり出して専念するくらゐでなければとても無理ですから、砲術長が諒解してくればお引き上げしませう」

鈴木は答へた。砲術長の山森中佐が、

「よし、やれやれ。大砲の方は俺が見てやる」

と励ましてくれた。

ボートは巡洋艦が一隻、戦艦が二隻つつ出す。これが全部集まつて、聯合艦隊のレガッタになる。前期は望みがながい、後期のレースに優勝を賭けて、鈴木大尉は長門クルーの猛訓練を始めることになつた。応援団も編成した。

雨の日や航海中は練習出来ない、百斤バラストにロップをくくりつけて引つ張らせる。これでまづ、筋肉を作る。下手をすると、身体をこはす重労働で、フォームだけきれいでもいけないし、むやみに力ばかり入れてもいけない。一時間も漕ぐのだから、呼吸をととのへることが大事で、背骨をキールにまつすぐに、突き出して力一杯水をかけば、身体が前へ倒れる時休む間がある。

「必ず優勝させるから、俺の言ふ通りにやれ」

鈴木大尉は、艇長の下士官といつしよに、いつもチルラーのところへ坐つてゐた。

寒風の中で演練されたボート・クルーの腕が、やうやく上つて来た一月末日、あすは年度はじめの集結地有明湾へ向けて横須賀を出港といふ晩のことであつた。

旗艦は陸奥に変更になつてゐた。中沢大佐は、米内中将から陸奥の長官室に呼ばれ、

「先任参謀、少し意見を聞きたいことがある」

と言はれた。気配を察した中沢は、

「何か重要なお話でしたら、参謀長といつしよに伺つた方がよろしいと思ひます。参謀長の部屋へ参りませう」

と、米内長官を案内して、病気で引きこもつてゐる岩下参謀長の私室をノックした。岩下少将がベッドに起き上つて迎へると、

「実は今、東京から電話で、俺に上京しろと言つて来た」と、米内は切り出した。

「多分、大臣になれといふことだと思ふが、どうしたものかネ？」

正月休会あけの第七十帝国議會で、政友会の浜田国松が、軍部の横暴、政治上の独裁傾向を難詰する勇敢な演説をおこなつたのが、一月二十一日である。国民の多くは、新聞を読んで近ごろ胸のすくやうな演説と感じたけれども、寺内寿一陸相と浜田代議士との間に、

「軍を侮辱した」

「軍を侮辱した言辭がどこにあるか」

と、いはゆる「ハラ切り問答」の騒ぎがあり、陸軍は態度を硬化させた。政党の反省を求めるといつて陸軍が議會の解散を要求し、やうやくそれを回避した広田弘毅の内閣は、二十三日責を負うて総辭職してしまつた。元老西園寺公望の奏請によつて、宇垣一成大將に組閣の大命が降下した。

宇垣は明治元年生れの七十歳、陸軍の長老の一人だが、憲兵隊司令部や陸軍省軍務局、参謀本部には、前々から宇垣反対の空氣が強かつた。彼が「政界の惑星」といはれて国民一般に人氣があり、重臣や各政党、財界からも期待を持たれてゐる、その分だけ、陸軍の中堅將校たちに受けが悪かつた。二・二六事件といふ不祥事のあと、当分は全軍一致姿勢を正して政治への口出しをつつしむかと思はれた陸軍は、「軍の総意」と称してソップを向き、宇垣のもとに陸軍大臣を出すことをこばんだ。

そのため、宇垣内閣は流産し、あらためて林銑十郎大將が宮中に召された。林には「後入齋」といふあだ名があつた。後入齋とはロボットのことである。ロボットの首相なら、陸軍の中堅幹部の思ふままに動かすことが出来る。

政局のかうした動きは、むろん聯合艦隊司令部でも分つてをり、中沢先任参謀は、苦が苦がしい話だと思つてゐ

た。

せつかく長官以下気心の一致したスタッフで、これから新しい年度の聯合艦隊を動かして行かうといふ時に、米内中將を林後入齋のもとへ差し出すのは惜しい気がしたが、意見は下の者から述べるのが順序で、考へた末、

「それは、此のさい、やはりおやりになるべきだと思ひます」

と進言した。病床の岩下參謀長も、

「先任參謀の言ふ通りです。決定まで、艦隊の出港はいくらでも延ばします」

と、同意見であつた。

「さうか。それぢや俺は上京するよ」

米内はさう言つて、用意させた内火艇でフネを出て行つた。

予想通り、東京では海軍大臣就任の交渉が待つてゐた。

米内は緒方竹虎に、すこぶる面白くない顔つきで、

「軍人から軍属に転落ですか」

と語つたさうだが、二月二日、林内閣の海相に親任され、わづか二ヶ月で聯合艦隊司令長官の職を去つた。

一部に、「あれは大物だ」といふ評判はあつたけれども、

米内は兵学校の卒業成績も中くらゐで、これまで大して目立つ提督ではなかつた。自分でも、五年ほど前には、鎮海要港部司令官を最後に、中將で待命になるものと決めてゐ

た。

米内の大臣かつぎ出しを策したのは、前年の十二月、航空本部長から海軍次官に變つた山本五十六であつた。次官として政治面にタッチするやうになつた山本は、日本の前途に対して強い危機感を持つた。それは、陸軍が唱へる危機、「非常時」とは別のもので、むしろ陸軍や右翼や、それに迎合する言論界が「非常時々々々」と騒いでゐること自体が、彼にとつての「非常時」であつた。

かういふ時に、並の才智やありきたりの政治的手腕は役に立たない、米内さん以外に人はないと山本は考へたらしいが、彼が強引に引き出し米内が引き受けた以上、互ひに責任は重かつた。

山本の茶目については定評があり、米内に関しては小泉信三が、

「米内さんの座談はユーモアがあつて聴くものを楽しくさせた」

と書いてゐるが、日常表面的にはさうでも、これからの二年半は、二人にとつて苦悩の連続の日々になる。

彼らは、林銑十郎大將のやうな「後入齋」ではなかつた。ロンドン条約、五・一五事件以来、とかく乱れがちだつた海軍部内は、米内山本が上に坐つてからみごとな統制下におかれ、内政外政両面で陸軍の暴走に命がけの抵抗がおこなはれる。

米内のあとの司令長官には、前の海軍大臣永野修身大將が着任し、艦隊はおくれて二月四日、横須賀を出港した。

出港前、参謀長の岩下保太郎少將がフネを下りて横須賀海軍病院に入院した。病名は重症の黄疸であつた。中沢首席参謀が、当分の間参謀長の職務執行を命ぜられた。

ただし、長門の一般乗員にとつては、司令部のかういふ人事の動きより艦隊のボートレースの方が当面の関心事で、二月六日有明湾入港、投錨と同時に、「総短艇用意」がかつた。

鈴木成章大尉は、未だ訓練不足だし、前期は望み薄と思つてゐたが、この日、長門のクルーは陸奥のカッターを二分二十五秒、日向のカッターを一分四十五秒引きはなして、一着に入つた。「長門市中甲板町右舷通廿」の「長門新聞社」は、早速、

「快報!! 長門第一!!

見よ!

特艇員ノ必死ノ努力ト挙艦一致ノ応援トニ依ツテ、猛練習二ヶ月、聯合艦隊集合劈頭云々」

と、「本紙ニ再録セス」の号外を発行した。

艦内はボートレースで沸いて、参謀長のことなど忘れてゐたが、入院中の岩下少將は病状が悪化して二月十八日急

逝し、小沢治三郎少將が同日付で岩下の後任に補せられた。

新参謀長の小沢治三郎も、岩下や中沢と同様、前の長官米内中将を畏敬してゐた。二年前、彼が重巡摩耶の艦長の時、第二艦隊の司令長官だつた米内から、

「加藤寛治大將を元帥にせよといつて、署名運動をしてゐる者が一部にあるやうだが、君はどう思ふか?」

と聞かれたことがある。

「とんでもない話です。加藤さんは美保ヶ関事件の責任者ではありませんか」

小沢が答へると、

「うん、分つた」

米内はさう言つて輕くうなづいただけであつたが、無口で穩やかなこの人に小沢は何かきびしいものを感じた。米内さんは、名利榮達のためにする策謀、陰謀、公私混淆、部内の統制を紊す政治的動きは、決して許さうとしないなと思つた。

長官室に米内中将はもうゐないけれども、年度はじめの彼の希望通り、昭和十二年の聯合艦隊は前期、旅順大連に入らなかつた。長門は三月二十七日寺島水道発、陸奥、日向、榛名、加賀、鳳翔、龍驤その他の艦艇と共に、途中訓練をつづけながら青島へ向つた。

昨年と同じやうな、五日間の「青島の休日」を楽しんで

有明灣に帰着したのが四月六日で、それより三日前、巡洋艦足柄が横須賀を抜錨し、英国ポーツマス軍港への航海に出た。かつて来日して、長門を訪れたエドワード八世——昔のプリンス・オヴ・ウェールズが、シンプソン夫人との恋で王位を去り、弟のヨーク公がジョージ六世として英国王の位についた、その戴冠記念観艦式に参列するためであった。これは、旧日本海軍の軍艦が公式に英国を訪問した最後の航海になった。

兵科六十一期以後の卒業生なら知らぬ者のない江田島の名物英語教官、平賀源内先生といふ人がゐる。本名は春二だが、「源内先生、源内先生」と呼ばれてゐた。この平賀春二の書いた「元海軍教授の郷愁（昭和四十六年）」と題する本に、足柄の英国行き航海のエピソードが出て来る。「源内師匠講談十席」といふ副題通り、多少「講談」仕立てで実名は伏せてあるが、シンガポール出港後、足柄艦長は、艦長室の飾り棚においてある接待用の黒のジョニー・ウォーカーが、少しづつ減つて行くのに気がついた。

従兵を呼んで、

「お前は酒が好きか？」

と聞いてみたが、

「いいえ。酒は苦が手であります。ビールなら半分くらゐ、ウイスキーはきつくて手が出ません」

と、実直さうな返事で、自分の気のせゐかも知れないし、

盗み飲みとしたら誰がやるのか分らなかつた。海軍では洋酒の蒸発を確かめるのに手があつて、瓶を逆さにするか倒すかして飲みのかしのとこへ目立たぬやうにマークをつけておく。長門の士官室でも、みんなやつてゐた。

足柄艦長が、ジョニー・ウォーカーの瓶を倒し、鉛筆でしるしの線をひいて、翌日計つてみたら、僅かながらたしかに減つてゐる。没い顔をして、しばらくそれを眺めてゐた艦長は、つとデスクから立ち上ると、引出しの中をさがして空瓶を一つ取り出した。問題のウイスキーを全部そちらへうつし、カラになつたブラック・ジョニーの瓶をさげて、彼はとなりの艦長浴室へ入つた。浴室は、西洋式で便所といつしよになつてゐる。

やがて、同じ量だけ茶色の泡立つ液体でみたしたウイスキー瓶を、紙でふきながら出て来た艦長は、いつもの飾り棚にそれをおいて、消毒液で丹念に手を洗つた。

次の日——、また減つてゐた。おまけに、瓶の位置が變つてゐる。

実直な兵隊と信用してゐたが、やつぱりあいつがやるにちがひない、あれを飲んだらさすがにびつくりしただらうと、艦長はベルを鳴らして従兵を呼びつけた。

「貴様、飲んだら飲んだと正直に言へ。人間誰しもあやまちはあるんだ。正直に言へばとがめはせん」

詰問すると、

「いいえ。私は飲みません」

艦長従兵は答へた。

「飲まないものが、なぜ瓶の位置が變つて量が減つてをるか」

「ハイ。瓶はたしかに私が動かししました」

「何のために動かしした？」

「それは」

従兵は説明した。

「毎朝、艦長の洗面後に差し上げてをります紅茶の中に、あのウイスキーを少量つづお入れするためであります」

「『——ウー——』艦長思わずお口元を拭き給ふつ、『そうであつたか、ワレ過てり。オレの思い過ごしであつた。』

——オレが悪かつた、ゆるせ——」帝國軍艦足柄艦長、従兵のまなこにご注目、室内でありながら、無帽でありながら、ねんごろに正しい挙手の礼を賜うた」といふ話である。

五月十二日がジョージ六世の戴冠式で、英國へ着いた足柄は、記念觀艦式に参列し、軍樂隊を上陸させてハイドパークでロンドン市民に演奏を聞かせたりしてゐたが、そのころ長門艦長鮫島具重大佐の母校学習院で、「一度生徒に長門を見せてやりたい」といふ話を持ち上つた。

軍事参議官の野村吉三郎大將は、足柄が横須賀を出港した四月三日付で予備役に編入され、学習院の院長に就任した。院長が海軍大將で、長門の艦長が生徒たちの先輩であ

る。交渉はすらすらとまとまり、艦隊が整備休養、補充交替のため母港へ歸つて来るのを待つて、六月某日、学習院中等科高等科の男子生徒たち大勢が、野村院長引率のもとに横須賀の長門を見学に行くことになつた。井戸錠吉といふ兵曹長上りの巡視長が学習院にゐた。

井戸が海軍に入つたのは、これより三十二年前、日露戦争の終つた年の秋である。當時は五等水兵といふ階級があつて、履歷書に、

「明治三十八年十月一日

舞鶴海兵団へ入団

命五等水兵」

と書いてある。専門は砲術で、大正十四年、兵曹長で現役をしりぞくまで、滿二十年間海軍のめしを食つて暮した。昭和二年、月給五十五円の巡視として学習院に奉職し、昭和七年に巡視長——守衛の親玉になつた。

五等水兵四等水兵時代、ずゐぶんつらい思ひも味はつたのに、井戸は海軍がなつかしくてたまらず、長門見学と聞いて、生徒たち以上に張り切り出し、古い紺の第一種軍装を一着に及び、短剣をつり、胸に勲六等瑞宝章の略章をつけて、勇んでついて来た。野村院長の方は、学習院のきまりで、詰め襟の教員服姿であつた。

長門は沖のブイに、もやつてゐた。

舷梯を上つて来る一行の中に、一人、准士官があるのを